**「学び・やり甲斐・ACTIVEプロジェクト」の指導内容を中心とした、**

**「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の実践例**

**～～【根拠】を明確にした意見の伝え方を学ぶ～～**

甲斐清和高等学校　国語科

**（１）課題の内容**

　次年度より導入される「大学入学共通テスト」では、思考力・判断力・表現力を問う記述式問題の導入が先送りされたが、大学受験にとどまらず、大きく変容する実社会の中での「国語力」はますます重視されていくことだろう。私立高校という建学の精神のもとに教育活動を自由に展開できる環境にあり、多様な科・コースを有する本校では、日頃から様々な角度で生徒に対してアプローチを行い、「国語力」の向上を目指している。しかし、生徒の実態としては、会話や文章中の情報を正確に受け取って多角的に考察したり、それを他者に伝えたりすることへの苦手意識が強い傾向にある。そのため、３年次における進路実現に向けた取り組みの際、面接で**【話せない】**、小論文が**【書けない】**、企業（大学や専門学校）の意図が**【理解できない】**……といった壁に直面する者も少なくない。したがって、早期から思考力・判断力・表現力を養うべく、１年次の国語総合の授業内において以下の取り組みを行った。

**（２）課題改善に向けた具体的な取り組み**

**①小説『羅生門』（２学期）**

　「『羅生門』の舞台となった当時の京について」・「『羅生門』を書いた頃の芥川龍之介について」・「映画『羅生門』について」という３つのテーマの中から１つを選択し、図書館やホームページ、要覧等を利用しながら調べた結果をレジュメにまとめさせた。優れた作品は、校内に掲示している。

　また、「下人の行方は、誰も知らない。」で終わる本文であるが、下人はこのあとどうなったかについて考えさせた。付箋を用いて、前述の調べ学習でまとめたことや本文の描写を拾いながら、グループで結末を検証させる形式をとった。

**②意見文「新聞に投書してみよう」（３学期）**

　新聞の投書欄を読み、意見文とはどのようなものかを学習したうえで、「最近気になっていること」をテーマに500字程度の意見文を書かせた。よく書けているものについては、山日新聞社の「10代の意見」に投稿。

**（３）取り組みの成果とその要因**

　いずれの取り組みも、段階毎に細かい指示・評価を行うことを心掛けた。中でも、構成メモを作る段階を大切にした。表現活動に対する苦手意識が強い生徒にとって、「どのようなこと」を「どのように表現すればよいか」考えること自体が最初の壁であると思う。そこで、メモ用紙や付箋を活用して、書く（話す）ための材料をできるだけ多く集めること、そして集めたメモを、構成（まとめ方）の枠組みに倣って組み立てていくことを徹底させた。多少時間がかかってもメモをしっかり作ることで、自分の立場（主張）が明確で、根拠も具体性のある文章が書けるようになった生徒が多い。グループ討議においても、同様の傾向が見られ、生徒たちが主張を述べるための根拠の重要性に気づけたことは良かったと思う。

**（４）取り組みの中で感じられた課題と考えられる原因**

　枠組みを意識させるような細かい指示・助言は、苦手意識の強い生徒にとっては大きな手立てとなりうるが、ともすると、授業者の価値観や参考資料の内容を焼き直した文章・作品になってしまう危険性を感じた。メモを作成する際に、図書館の本や資料よりも、スマートフォンで検索し、情報を得た気になっている点も気になった。そのため、意見文やレジュメは判で押したようなものが多く、オリジナリティに欠けている。また、語彙や知識の乏しさも目立ち、表現したいことがうまく伝わらないケースも。コースや科によって生徒の特性が異なり、取り組みが上手くいく集団とそうでない集団の差が大きいので、表現活動の評価「基準」を定めることが難しい。活動が上手くいかないケースには、他者の話を聞いたり話し合ったりする際の姿勢が定着していない、自分の考えを他者に伝えることを極度に恐れる……といった国語科の指導以前の問題が背景にあった生徒も多い。

**（５）（４）で感じられた課題に向けての改善策（案）**

　どんな小さな取り組みでもいいので、表現活動の機会を増やし、「自分の意見を他者に伝えること」「他者の意見を聞き、理解すること」を繰り返し訓練する必要があると思う。シラバス作成の際、系統立てて表現活動を盛り込むのと同時に、「総合的な学習」といった本校独自の科目の担当者や司書教諭との連携・情報共有といった、国語科の枠を超えた体制づくりというものも見据えていくことができたら理想的である。